

あらたな聖地巡り

いわたに ひろふみ
岩谷 洋史

立命館大学非常勤講師・民博 外来研究員

自治体とマンガ文化

一九八〇年代後半から日本のマンガやアニメーションは、国際的な注目を集めている。その動きが活発化するなかで、日本国内においてもそれらに対する再評価がおこなわれてきた。たとえば、文部科学省の『教育白書』（二〇〇〇年度）でマンガやアニメーションが芸術分野のひとつとして位置づけられるなど、いわゆるポピュラー文化に属するものが「日本文化」のひとつであるという地位まで獲得するようになってきた。

その潮流のなかで、まず、思い浮かぶのが、国内外の「国際マンガサミット」や「世界コスプレサミット」などの国際的なイベントの開催である。また、国内におけるマンガ関係の文化施設（ミュージアム、記念館などの名称がつけられる）の設立、さらには、高知県の「まんが王国、土佐」、鳥取県の「まんが王国とっとり」などといったことばに見られるように、地方自治体が主体となつたさまざまな企画の動きである。

なかでも、鳥取県境港市の「水木しげるロード」は、商店街に設置された、水木しげるのマンガに登場する妖怪をモチーフにした、ブロンズ像によって有名になった。こ



水木しげるロード内にある「妖怪神社」

の街は、「魚の街」であつたが、数年間で「妖怪の街」へとも変貌をとげた。近年では、水木しげるのマンガに関連するように、鉄道にねこ娘列車が走り、空港が米子鬼太郎空港と愛称でよばれ、さらには、隠岐島まで水木しげるロードが延長されるといったように、周辺地域の再編成がおこなわれている。地域が経済的な衰退から脱するために、一人の漫画家が生み出した妖怪をあらたな文化的な資源として見出し、活用しようとしたとき、その地の意味が書き換えられるようになったのである。

愛好家による「聖地巡礼」

一方、こうしたところに訪問する人びとは何を求めるのであろうか。「聖地巡礼」ということばがあるが、ここでいう聖地とは、マンガ、アニメ、ドラマの舞台となつたところである。それらの熱心な愛好家たちが、自分自身が好むものに縁のある土地を聖地とよび、あたかも巡礼のように訪れることをいう。もちろん、そこに訪れるすべての観光客が、熱心なファンであるとは限らない。しかしながら、ここを訪れる人たちは、メディアによって創造されたものを眺め、確認することで、個人の経験に取り込んでいくのである。